

---

# とわのこぬこ

uyr yama

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とわのこぬこ

### 【Nコード】

N0029Y

### 【作者名】

u y r y a m a

### 【あらすじ】

ぬこは今日も、にゃーにゃー、にゃーにゃー。海鳴の街の空は青く。海も、青い。世界は広く、暖かく。やさしいご主人と、その妹たち。そんな優しい環境で、ぬこは前世のしがらみに気付かない。だって、ぬこはぬこだもんね？

ぬこてんせー

身体中が痛い。

呼吸をするのも辛いほど。

いいや、それこそ、生きる事が辛くなるくらいに、身体が痛い。

痛みのせいなのか？

視界がぼやけて何も見えない。

耳鳴りが酷く、聞こえてくる音はザーザーといった異音だけ。

だから周りがどうなっているのかもワカラナイ。

ああ、死ぬのだな……

あともうちよつとだったのにな……

苦節20ウン年。年齢〓彼女イナイ歴から何とか脱し、ようやく、ようやく童貞を卒業できそうだったのに……っ！

クソっ、クソっ、クソっ！！

腹立たしさと無念さで、気が狂ってしまいそうだ。  
だけでも、まあ、仕方ないか……

傷だらけで血塗れな青年は、そこで生きるのを諦めた。

彼は諦めが速いのだ。

泣いてすぎる恋人と、青年に突き飛ばされて呆然としている少女と、その少女の母親が申し訳無さそうに、ありがとう、ありがとう、と何度も頭を下げていた。

でも、耳鳴りが酷い青年の耳には届かない。

「クソ、マジで痛えよ……」

吐き捨てられた悪態は、恋人の嘆きの慟哭のせいで誰の耳にも届かない。

それでも、今わの際の奇跡なのか、青年の視界がクリアに広がった。耳鳴りがサァーっとひいて、全ての声が聞こえる様になった。

青い、青い、どこまでも青い空だ。

ざわめきと、嘆きの慟哭が、それら全てを台無しにしてたけど。

視線を巡らせる。

涙と鼻水まみれの恋人と、真っ青にしているトラックの運転手。

そして、黒い子猫。

「生まれ変わるなら、ぬこがいい」

「バカっ！ なに……なに言ってるのよぉっ！！ って、ぬこって言い方止めなさいってあれだけ言ったでしょ！？ オタク臭いのは

止めろってアレだけ……」

泣きながらそう言う恋人に、青年は最期の力で笑ってみせた。

「お、まえの、そういうトコが、大嫌いなんだ。だから、もう、別れようぜ。そして、さっさと、俺のことな……か、わす……ちま、え……」

死に際に格好つけるのは、漢のロマン。  
満足だ。これ以上ないくらいに満足だ。

童貞捨てられてたら、言う事なかったんだけどな。

そこで、青年の命の鼓動が止まった。

「ばかぁーっ!!」

だから恋人の嘆きの絶叫は、青年の耳には届かなかった。

次に気がついたとき、やっぱり目は見えなかった。  
それでも本能なのかな？

暖かい何かにすりよって、必死にかぶりついた。  
周りにも、自分と同じ何かが一杯いる。

なー なー みいー みいー

ああ、この声は、ぬこ だ！

いや、もしかして、自分もぬこなのではなかるうか？

そういや、死ぬ直前に思ったなー。

生まれ変わるなら、ぬこがいいって。

そう考えながら、ぬこは兄弟だか姉妹に負けないよう、必死にお母さんネコのおっぱいをちゅーちゅーする。

人間じゃなくなったのはショックだけでも、これからのぬこ生、必死に生きる為にはおっぱいが必要なのだ！

元青年……現ぬこはやっぱ諦めが速かった。  
人間としてのプライドをあっさり捨てて、ぬこになったのだから。

ぬこは今日からぬこになる。

ネコではなくて、ぬこ。

彼女が言ってたではないか。

ネコをぬこと呼ぶのはヤメロって。

オタクみたいだからヤメロって。

だったらぬこはぬこになろうと思う。

世の紳士たちの為にも、ネコではなくぬこに。

そうすれば、もう、オタクだとバカにされないのだから……

ぬこが自分をぬこだと言っても、しょせんはネコなんだと分かっていない。

そんなぬこは、お腹いっぱいオツパイを吸って、ふぁ〜と大きく欠伸をしたあと、兄弟姉妹に囲まれながら、暖かい眠りにつくのだ。

さあ、アナタの望みはかないました。

どうか、今度は幸せに……



にー

ぬこは目の前の光景に、目をキラキラさせた。

ぬことして産まれ落ちて以来、初めて目にした人の文明。

小高い丘の上から見たその光景は、前世の人間だった頃の郷愁を、否が応にも思い越されるからです。

「みゃーう」「みー」「みゃう」「みゃん」「なーなー」

さあ、行くのだ！

っと、ぬこのきょうだい達はぬこを急かしました。

ぬこを置いて、いつのまにやら立派な大人の猫に成長したぬこのきょうだい。

でもぬこは、いつまで経ってもこぬこのまんま。

きょうだい達は、みんなみーんな立派な成猫になったのに。

そうして一匹、また一匹とママネコさんの下から巣立っていくきょうだいたち。

本当だったらぬこもきょうだいたちと一緒に巣立つはずだったのに、

ママネコも、きょうだいネコも、ちっちゃいぬこが心配で仕方ありません。

だからぬこはママネコとずっと一緒。

ぬこが産まれた春の季節から、とっても暑い夏に変わり、色鮮やかな秋に変わり、白い死神が吹き荒ぶ冬になり……

そうして再び春になったある日、ママネコの下から巣立ったきょうだい達が、ぬこにとっての優しい世界を見つけ出し、こうして此処へと連れて来たのです。

この世で最も猫にとって安全だろう、海鳴の町こそ、ぬこにとっての安息の地となると信じて。

ぬこは子供の両手に納まる程度の身体をピョンと跳ねさせ、きょうだいと、そして大好きなママネコの方をジッと見ます。

「にゃーう（ぬこ、アナタの巣立つ日が来ました）」

「なーう？（なに言ってるの？）」

……前世が人間だったせいでしょうか？

ぬこは猫語が分かりませんでした。

それでも雰囲気的に何を言ってるのか分かってるのでしょうか。

小さな小さな両のお目々に涙がいっぱい。

立派な成猫になったきょうだいたちに、ふわふわモコモコの頬で、すりすりと頬ずり。

最後にママネコの鼻先をペロリと舐め……坂を一気に駆け下ります。

精神が完全にこぬこになった、前世が人間で、今はこぬこのぬこ。きょうだいとママネコが心配そうに見守る中、コテンと足を引っ掛けて、

「みゃうっ！？」

毛玉のようにころころと、人間の町へと転がり落ちていきました。

「「「「「にゃーっ！？」「「「「「

思わずぬこに駆け寄りそうになったきょうだいとママネコたち。

でも、

「みゃうみゃうみゃーっ！」

ぬこの結構余裕そうな鳴き声に、足を止め、後ろを振り向きます。

「「「「「にゃんにゃんにゃーん！」「「「「「

一斉に別れの一声を上げると、「みーうっ!」ぬこの鳴き声を背に猫の世界へと帰っていきました。

さようなら、ぬこ

猫たちの、別れの言葉……

猫の……野生の世界は厳しい。

もう、会う事はないだろう、きょうだいとママネ」。

ぬこは泣きながら転がり、そして……

ひゃっほー。人間ごはんがぬこを待ってるぜー!

あっさりと気分を変えました。

……ぬこは、諦めが速く、気分に入れ替えも速いのです。

そうして、ぬこになって初めてのアスファルトに、ぬこになって初めての海の香り。

ぬこになって初めての人間に、ぬこになって初めてのひとりぼっち

……

とわのこぬこの冒険が、こうして始まるのです。

なーう なーう にゃん にゃん にゃん みゃう！

ぬこの鳴き声が、海鳴りの町に響きます。

ぬこはそろそろ人間の食べ物に恋しいです。

ネズミやスズメがご馳走な生活もいい加減に疲れたし。

ああ、魅惑のジャンクフード……

待ってる！ コンビニ！

待ってる！ カップラーメン！！

ぬこは、自分がぬこだって、覚えてるんでしょうか？

ぬこが行っても、コンビニでカップラーメンは買えませんのにな。



みー

むかーしむかし、海鳴の町に一匹のこぬこがいました。

そのこぬこ、

リンカーコアを持っていたり、気を操って最強ぬこだったり、  
はたまたジュエルシードの力でミュータント化したり、  
いやいや、それどころか死にかけて使い魔化したり、

なーんで、いつさいない、普通だけでもちょっと変わったこぬこ。

ぬこは海鳴の町に入るなり誓います。

ぬこは、町に生きる立派な野良ぬこになる！

ママネコやきょうだいに負けない、立派な野良ぬこになるのだ！

ととととと……

立派な野良ぬこを目指すぬこが、海鳴の町を短い足で疾走します。

目指すはコンビニ。人間ごはん！

……そう、こんなちよつと変わったとわのこぬこのお話が、海鳴の町で始まります。

通りすがりの人々が、ほんわかした表情で見ている黒い毛玉。ちよこんとコンビニの前に座る様が、とっても愛らしい。

「みゃう……」

でも、悲しげに鳴いています。



ぬこの目の前の建物からは、とても好い匂いがしてくるからです。  
お腹がきゅって鳴るのに、ぬこはその建物の中に入ることが出来ません。

カリカリ、カリカリ……

「にう、にう」

悲しげに泣きながら、入り口の扉に爪を立てぬこ。  
おでん、にくまん、お弁当……  
数々の魅惑の商品がそこにある。

でもぬこはぬこだ。

人ではないから入れない。

いいえ、入ることが出来たとしても、中の商品を買うことは出来ないのです。

それに、建物の中の人間が、煩わしげにぬこを睨みます。

ぬことして生を受け、初めて感じる人間の負の感情。

ビクンッ！ 背中と言わず、全身が総毛立つ。

ぬこは後ずさるようにして数歩後ろに下がると、次の瞬間にはピュ  
ーっと一目散に逃げ出しました。

「みゅあ、みゃうみゃうみゃー（怖えー、人間怖えー）」

ぬこは忘れていたのです。  
自分がただのぬこだって。  
力もお金も何もない。ただのぬこだって。

ぬこは寂しげに周りを見ます。

視界は低く、地面に近い。

今までは森の中で、周囲には猫だけだったから気にしませんでした  
が、やっぱり人とぬこは違いました。

ぬこであると決めてはいましたが、まだまだ心の奥底では人間だと思  
っていたのです。

でも、ぬこは強い子です。

たとえ力がない　とわのこぬこ　でも、心の強さだけは誰にも負け  
ない。

だから、「にゃん、にゃう（ま、いっか）」と、やっぱりあっさり  
と気分を変えました。

果たして、コレは心の強さなのでしょうかね……？

それはともかく、ぬこはお尻ふりふり、しっぽフリフリしながら歩  
き出します。

ぬこはお腹が空いてるのです。

小さい身体でも、いっぱい食べるぬこ。

死の冬を乗り越えただけあって、一日二日程度食事を抜いても死にはしませんが、このままでは力がなくなつて狩りが出来なくなつてしまうのです。

……今はもう、ぬこを守り、ぬこのためにご飯をとってくれるママネコはいません。

ぬこは全部自分の力でご飯をゲットしないといけないのです。

と、その時でした。

ぬこの身体が大きな影に覆われたのは！  
マズイ！　ぬこは大慌てで逃げ出そうとします！

ぬこは食物連鎖的に結構下の方に陣取ってますから、自分よりも身体が大きい獣や、空を飛ぶ猛禽類とかカラスなんかには襲われたらひとたまりもありません。

だからダッシュしようと足に力を入れた瞬間、

「腹が空いているのか？」

久々に人間の言葉を聞きました。

ぬこは恐る恐る後ろを振り返ります。

ズボンは黒、服も黒、髪も黒ならば瞳の色も黒。

全身黒づくめの高校生位の少年が、むっとした顔でぬこを見下ろしています。

ぬこは猫の言葉は分からなかったけど、やっぱり人間の言葉は分かるんだなと思いながら、「なー」と一声鳴きました。

すると少年はコンビニの袋の中から缶詰を取り出し、パカッと開けて、ぬこの前に差し出します。

缶詰には、猫まっしぐら！ と書いてあるのがぬこには読めました。

「にゃう？（食べていいの？）」

ぬこは不思議そうに鳴きます。

「ああ、いいぞ」

「みゃう？（ほんと？）」

「ああ、ほんとのほんとだ」

「なーう、なーうっ！」

元人間としてのプライドがまったくないぬこは、喜んで缶詰に顔をつつこみ、がふがふ、がふがふ、と一心不乱に貪ります。

初めて食べる猫缶は、思っていたよりもずっと美味しく感じられました。

それがぬこだからなのか、元々美味しいものだったからなのかは、ぬこには分かりません。

「乳離れは済んでたか……ミルクと猫缶、どちらがイイのか迷ったが、よかった」

少年のむっとりとしたしかめっ面が、ふんわり柔らかく笑いました。

げふっ

ぬこは全部食べ終わると、小さくゲップします。

そうして前足で顔をゴシゴシしたあと、少年に「みうつ!」元氣良くお礼しました。

そして気づくのです。

「にゃうん?」(どうしてぬこがお腹が空いてるのを知ってたの?)「

すると少年は言います。

「コンビニの前で鳴いてただろ?」

「なーう?(それだけで?)」

「ああ」

少年は言葉少なくそう言うと、ぬこが食べた猫缶をコンビニ袋に戻し、踵を返しました。

「じゃ、またな」

ぬこに背中を向け、手を小さくひらひらさせます。  
それはさよならの挨拶。

でも、ぬこは……

ぬこは、この黒いのをこしゅじんに決めた。  
無愛想でちょっと怖い目つきだけど、きっと優しい人だとぬこセンサーが告げるから。

もう立派な野良ぬこになるなんて誓い、すっかり忘れてます。  
ぬこはぴよぴよこと、短い足で必死に少年の後を追いかける。  
そんなぬこに困った少年は、ぬこを抱き上げ視線を合わせると、

「家は飲食店なんだ。だからお前は飼えん」

そうはつきりと告げるのです。

でも、ぬこはそのまま少年の身体によじ登り肩に到ると、しっかりと  
しがみつきました。

そうして少年の頬に何度も頬ずりして、

ごしゅじんに、ぬこをもふる権利をあげよう！  
なんだったら、肉球ぷにる権利でもいいぞ！

少年は大きく、「はあ〜」と溜息を吐くと、疲れたように自宅へ  
と向います。

「一応は母さんと父さんに聞いてみるが……」

ダメだといわれたら、その時は諦めるよ？

言外にそう言う少年に、ぬこは分かったと返事をします。

「それでも、もしも許可がでたら、その時は妹のなのはと仲良くし  
てくれ。俺たちは、あの子に何もしてやれなかったから……」

「にゃーうー！」

「俺は高町恭也、お前に名はあるのか？」

「にゃーうー！」

「そうか、ぬこか……変な名だな」

「なーうつ！」

……ぬこは気づいているのでしょうか？

少年と意志の疎通が出来てることに。

まあ、気づいても、気づかなくても、ぬこはぬこ、なんですけどね。



## みー（後書き）

原作とらは3でも、恭也は道端で出会った猫に餌をあげるために、コンビニに行ったりしています。

ちなみにその猫、後に自分の子供を恭也に見せるエピソードがあったりなんかして、とってもホンワカです。

幕間 ひろいん？ の憂鬱

私立聖祥大学付属小学校は一年生の教室で、一人の金髪美少女が窓際の席に座ってます。

「はぁ……憂鬱ね……」

重い空気を肺から出し、言葉通りに憂鬱そう。  
頼杖をつきながら、とても小学生とは思えない哀愁漂う瞳で、窓の外を見ていました。

「どうしたの、アリサちゃん」

つい先日、その金髪美少女、アリサ・バニングスの友達となった月村すずかが、心配そうに声をかけます。  
アリサは憂鬱そうな表情を隠すことなく、将来は大和撫子な美人になるわね、この子……と思いながら、

「ちょっとね……」

そう言って、手をひらひらさせました。

「話せないことなの？」

「別に……ただ、ちょっと捜してるヤツが見つからないのよ」

それだけ言つと、重い息をハア〜と吐き出し、話はこれでお終いとばかりに再び外を見ます。

アリサには、前世の記憶がありました。

ちなみにアリサ・ローウェルな前世ではありません！

あんなトンデモ悲しい平行世界な前世ではないのです。

かなり、近いけど……

それはともかく、アリサは前世で一人の青年とお付き合いをしていました。

特に際立った才能がある男ではありません。

イケメンだった訳でもありません。

それでも、前世の彼女は彼のことがとても大好きでした。

IQ180オーバーの超絶美人にして、絶対無敵のお嬢様！

群がる男は彼女の背後関係と容姿にメロメロです。

でも、彼は違った。違ったのです！

どう違うかと聞かれれば困りますが、とにかく違いました。

そんな彼のこと、アリサは好きで好きでどうしようもありません。

だからアリサは、奥手でオタクな彼を押せ押せで口説き落とします。彼女はツンデレな強気っ子でしたが、流石に年齢が20オーバーなだけあって、こういう時は積極的でした。

押せ押せアリサに彼は目を白黒させてしばし呆然としたあと、ひやつぽー、これで年齢〓恋人イナイ歴から卒業だぜ！　なんて言いました。

アリサは頬を引き攣らせましたが、まあ、これからの教育しだいよね？　なんて思いつながら、につこり笑います。

彼は何かと言うと、脱　童貞なんて叫ぶおバカさんではあったけど、言ってることと裏腹に、ガツガツ身体を求めようとはしません。

今迄彼女の周りに居た男たちとは矢張り違います。

ああ、やっぱりコイツにしてよかった。

アリサは幸せでした。あの日までは……

ある日、彼は子供を庇ってトラックに跳ねられ死んでしまうのです。

……アリサは泣きました。

いっぱいいっぱい泣きました。

泣いて、泣いて、泣いて……そうして彼の最期の言葉を思い出します。

お前の、そういうトコが大嫌いなんだ。だから、もう別れようぜ。そして、さっさと俺のことなんか忘れちまえ。

カッコつけ過ぎなのよ、バカっ！

私は絶対にアンタのことを忘れたりなんかしないからっ！

……でも、そうね。キチンと、アンタ以外の誰かと、幸せになつてみせるわ。

だから、だから今だけ……は、泣い、ても……いいよ、ね……

最後にもう一度だけワンワン大泣きしたあと、彼女は立ち直ります。だけど、世界は彼女にとって、とても厳しかったのです……

資産家の親を持つ彼女は、ある日、親の商売関係のトラブルに巻き込まれ、誘拐されて、そのまま……

アリサは、首を絞められ意識が遠のく中、最期に思いました。

ああ、死ぬんだ、私……

こんなだったら、アイツにさっさと初めてをあげればよかったな。

なのに、私ったら……

……会いたい。

アイツに、会い、たい……

会って、今度こそアンタと……

しあわせになるんだ

次に気がついたとき、彼女は赤ん坊になっていました。  
アリサは長い長い赤ん坊生活のなか、思ったのです。  
これはきっと、神様がくれたチャンス。

もう一度、アイツと出会い、今度こそ幸せになるための……

それでも思わなければ、赤ちゃんなんてやってられなかった、なん

てことは秘密です。

「……サちゃん、アリサちゃん！」

「ふえっ!？」

物思いにふけてたアリサは、突然に身体をかくかく揺さぶられました。

アリサを揺さぶっていたのは、すずかと同時期に友達になった高町なのは。

ツインテールをぴよこぴよこさせる、笑顔が物凄く可愛い女の子です。

前世では友人がまるで居なかったアリサは、すずかと、なのはがとても大切です。

「ねえっ！ちゃんと聞いてっ！」

「なによ、もう……」

「あのねあのね、昨日うちにねっ、ちっちゃいこねこさんがきたのっ」

なのは手をばたばたさせて、その子猫がいかに可愛らしいか説明します。

すずかは猫派なので、なのはが仲間になったことが嬉しいみたい。

でも、アリサは犬派です。

猫も好きですが、どうも彼がぬこぬこ言ってたのを思い出して、ちよつとイラッとする。

なんせアノばか。可愛い恋人ほつといて、猫ばかり可愛がるヤツでしたから。

まあ、逆恨みってやつですね。

でも、それはなのはの家にきた子猫には関係のないこと。

アリサは首をぶんぶん振って気を取り直すと、

「んじゃさ、今日はなのはんちであそぼっか？」

今日は丁度良いことに、塾とお稽古事はありません。

すずかはあるみたいでしたが、夜からなので嬉しそうに頷きます。

そして、なのはも……

「うんっ！」



元気の好い返事です。

そして、再びどれだけ子猫が可愛らしいかを語り始めました。  
楽しそうに聞くすずかと、ちよつと呆れ気味のアリサ。

そんなアリサは、なのはの話を聞いてるうちに、ふと思い出します。

生まれ変わるなら、ぬこがいい

あのバカの言葉です。

まさか、ね……

でも、もしそうだったら、どうしよ？

アリサとぬこの再会まで、あともう少し……

……でも、お互いに気づくんでしうか？

「でねでね、お名前は、ぬこちゃんって言うのっ！」

ぶーっ！ と思い切り吹き出したアリサは、わりと早くに気づくか  
もしれせんね。

「あ、アリサちゃん!？」

「どうしたの？ 大丈夫？」

「あ、はは、は……だ、大丈夫よ、大丈夫。そんな訳ないんだから  
っ」

「なにがなの？」

「なんでもないわよ!なんでもっ!」

主人公がただのぬこだって、みんなキチンと理解してるよな？

人間にメタモルフォーゼで、アリサとちゅっちゅっなんてないんだからなっ！

大体、ヒロ……って誰だよおまヒイきんぱつのあくあ wse d r f t  
gyふじこ1p

この作品自体の年齢的な設定。（原作とは関係なしに、この設定）

ぬこ 1さい

ごしゅじん 高校2年生（とらは的な意味で一年留年）

月村 忍 高校2年生

高町美由希 中学3年生

高町なのは 小学1年生

その他は、なのはの年齢に合わせて考えろっ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0029y/>

---

とわのこぬこ

2011年10月31日15時13分発行